

保育者養成課程の学生における子どもの健康に関する 知識・態度についての事例研究 —修業年限の違いによる検討—

山下 雅佳実 萩尾 耕太郎

A case study of knowledge and attitudes regarding children's health among students of Early Childhood Care and Education: Consideration due to differences in the term of study

Akemi Yamashita Kohtaroh Hagio

(2020 年 11 月 25 日受理)

はじめに

保育現場における保健活動は重要な位置を占めている。子どもの疾病や傷害への対応だけでなく、生活習慣の変化から生じる健康上の問題、子どもや自身のことに関する不安や悩みを有する保護者、そして暴力やネグレクトなどの児童虐待の問題などにも対応することが求められるようになってきている。保育所保育指針¹⁾では、保育は「養護及び教育を一体的に行うこと」を特色とし、保育所の取り組みにおいては、子どもの健康や安全の維持向上を図るための体制をつくること、子育て支援に積極的に取り組むこと、職員の資質向上を図ることなどに重点が置かれている。幼稚園教育要領²⁾においても「健康」が領域として、しかも他の領域に先立って取り上げられていることから、子どもの健康とその保持増進のための保健活動が重要視されていることがわかる。つまり、保育者に求められる専門性の一つに「健康」「保健」分野の知識・技能、態度があるといえる。

1) 研究の背景

2001 年に OECD より発表された幼児教育・保育政策に関する調査報告「人生の始まりこそ力

強く」³⁾では幼児期の学びがその後の子どもの発達や人生に大きな影響を及ぼすことが述べられ、保育や就学前教育の重要性の認識が高まっている。重要性の認識の高まりとともに、保育や就学前教育に関する制度や内容もここ数年で転換期を迎えている。2017 年には、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針が改訂され、教育・保育に関する内容が調整された。それに続き、教職課程認定基準等が改正(2017)され、2018 年には保育士養成課程の改訂がおこなわれた。

制度や内容の変革の背景には、保育者に求められる専門性の高度化という環境要因も大きな影響を与えている。保育現場の現状として、特別なニーズのある子どもの在園状況は、医学診断のある子どもを含めて極めて高い割合⁴⁾であり、保育者はこれらの子どもたちの多様なニーズに対応しなければならない⁵⁾。そのため、近年の法改正や法解釈により、保育者が実施できる医療的な行為の範囲が拡大しつつある。2009 年文部科学省スポーツ・青少年学校健康教育課長からの「医師法第 17 条の解釈について」の照会により、アナフィラキシーショックで生命が危険な状況にある子どもに対し、その場に居合わせた教職員が、あらかじめエピペンを処方されていて、本人が注射できない場合、本人

執筆者紹介：中村学園大学短期大学部幼児保育学科

別刷請求先：山下雅佳実、〒814-0198 福岡県福岡市城南区別府 5-7-1 a-yama@nakamura-u.ac.jp

に代わって注射することは、医師法違反にならないことが確認されている。また、2011年の社会福祉士及び介護福祉士法の一部改正に伴い、一定の研修を修了して認定を受けると、保育者も一定の条件の下に喀痰吸引、経管栄養など特定の医療的ケアを実施できるようになった⁶⁾。2016年に改正された児童福祉法では、すべての子どもたちが適切な養育を受ける権利を有し、健やかな成長と発達を遂げ、自立を保障される権利の主体であることが明記され、医療的なケアを必要とする子どもたちを受け入れる体制を整えていく方向性が示されている。

保育に求められる専門性の高度化に対応するために、現職の保育者に対する研修が課されるようになった。例えば、幼稚園教諭における教員免許更新制度⁷⁾と、保育士における勤続年数に応じた研修⁸⁾である。しかし、これらは就職した後の現職保育者のための制度である。

高旗ら(2007)⁵⁾は保育園の園長に対するアンケート調査を実施し、養成段階で形成が期待される保育者の力量のうち「必要性が高い」と回答した割合の上位3項目のうち2項目が「心身健康(93.0%)」と「病気対処(91.1%)」であった。今般の保育者養成校には、子どもの心身の健康への配慮だけでなく、病気や障害などへの対処能力の育成が強く求められているといえる。

2) 課題と研究の目的

養成段階での子どもの健康・保健についての専門性の高度化が求められている一方で、養成課程に在籍する当の学生たちの現状はどうだろうか。まず、保育者に求められている専門性の高度化について、どのような認識を持っているのだろうか。さらに本研究で着目している「子どもの健康・保健」についての考え方は、どのようなものであるか。

これら現状把握と、今後のカリキュラムや教育内容の改善のための情報を提供するために、本研究において、以下の2点について学生より情報を収集し、考察していく。

- ①養成課程における学生の「子どもの健康・保健」に対する認識や知識について
- ②「子どもの健康・保健」に対する態度・意識について

また、大学と短大の修業年限の違いによる影響の有無を検討するため、就業年限の最終学年である大学4年生と短期大学2年生を対象とした。

方法

1) 対象者

中村学園大学教育学部4年生(大4)で「子どもの保健Ⅲ」を受講している女子学生6名と、中村学園大学短期大学部幼児保育学科2年生(短2)のうち、科目「幼児保育演習」で著者が担当している女子学生7名を対象とした。

2) 検討項目

(1)子どもの健康や保健に関する問題

対象者は著者が作成した子どもの健康や小児保健に関わる問題に解答した。問題は全30問で、解答はすべて4択の選択肢から選択する形式とした。アンケート機能を有する大学向けプラットフォームシステム(UNIVERSAL PASSPORT RX, 日本システム技術株式会社, 東京)を用いて対象者への配信、解答の集計をおこなった。本研究ではこの問題に対する正答率を子どもの健康に関する知識の指標とした。

(2)自由記述式アンケート

保育者が子どもの健康に関する知識や技能を持つことについて、自由記述式のアンケートを、プラットフォームシステムを用いて実施した。質問は以下の3つとした。

(質問1)

保育者の専門性をさらに高めるために保育者全体で身につけておいた方が良いと感じる知識分野は何ですか?もしくは、どのような知識ですか?

(質問2)

保育者が子どもの健康・保健についての知識を十分に持つことにより、どのような利点があると考えますか?

(質問3)

保育者の子どもの健康・保健についての知識が不十分であった場合に、どのようなことが起こる考えられますか?

(3)看護師養成校との遠隔授業の感想

対象学生が履修している授業内で、医療・保健分野との連携について学習するために、看護師養成校との遠隔(リモート)授業をおこなった。この授業は、看護師養成校との合同授業である。授業進行は看護師資格を持つ看護師養成校の教員によっておこなわれ、子どもの健康や保健にかかわる架空の事例について、保育者と看護師という相互の立場で、「子どもに対してどのようなかわりができるのか」についてデ

イスカッションをし、互いの役割の差異と連携について考察することを目的とした。考察を深めるための情報として、その際の感想を記録した。授業進行の都合上、授業で取り上げる事例については大4と短2で異なっていたが、授業の進行については同様の形式であった。

なお、自由記述式アンケートの結果と看護師養成校との遠隔授業の感想を併せて、子どもの健康に対する態度・意識の指標とした。

3) データ処理と解析

子どもの健康や小児保健に関わる問題の回答結果は Microsoft Office 2016 for Windows(マイクロソフト株式会社、東京)を用いて集計し、平均得点の修業年限の差の検定には Mann-Whitney の U 検定を用いた。また全 30 問の問題を系統から 4 つに分類し、その分類ごとの差を検定するために、 χ^2 検定を用いた。有意水準はいずれも $p < 0.05$ とした。

自由記述式アンケート(質問 2, 3)及び看護師養成校との遠隔授業の感想についてはテキストマイニング用ソフトとして、Windows 上で動作するフリーのテキストマイニングソフトである KH-coder(Ver. 3; <https://khcoder.net/d13.html>)を用い、出現する名詞を単語ごとに集計し、出現頻度が 2 回以上の単語を対象群(修業年別)で対応分析をおこなった。授業感想については「今回」「ディスカッション」「ありがとう」「ありがとうございました」という謝辞の単語が多数認められたため、強制分析除外の対象とした。質問 2 の回答の総抽出語は 379 語、質問 3 の回答の総抽出語は 295 語、授業感想の総抽出語は 752 語であった。

結果と考察

1) 保育者に求められる専門性の認識

アンケートの「保育者の専門性をさらに高め

るために保育者全体で身につけておいた方がよいと感じる知識分野は何ですか?もしくは、どのような知識ですか?」への質問に対しては、健康、保健分野についての回答が最も多かった(表 1)。このことから、保育者養成課程に在籍する学生自身も、保育者としての専門性の向上には子どもの健康や保健についての知識が必要であると感じていることが示唆された。

表 1 保育者に求められる専門性についての学生の認識

項 目 (記載があった内容)	挙げた人数
・ 健康、保健分野について	9 名
保健に関する知識	
子どもがかかりやすい病気の症状と対処方法	
怪我の適切な治療法(骨折や頭を打つなどの大怪我の対応法)	
看護について、アレルギーについて	
医療の知識	
アレルギーについての知識	
アレルギーの対応方法、エピペンの使い方	
医療的な知識	
医学的知識、社会養護に関する知識	
・ 多職種連携について	2 名
専門機関との連携	
様々な関係機関との連携、それぞれの役割、制度など。	
・ 保護者支援	1 名
・ 自己管理能力	1 名
・ 乳児保育	1 名
・ 災害や震災に対する対応	1 名

※自由記述回答から該当部分を抜粋し、著者がグルーピングした。
複数回答があったため、人数は延べ人数を表記。

2) 子どもの健康・保健に関する知識

子どもの健康・保健に関する知識問題の点数は、30 点満点中 17.0 ± 3.7 点(大 4: 19.7 ± 2.8 点、短 2: 14.7 ± 2.8 点)だった。Mann-Whitney の U 検定の結果、修業年限の差がみられた($p < .05$)。表 2 には問題の分類別の正答率を示している。 χ^2 検定の結果、問題の分類別の正答率に修業年限の差はみられなかった。感染症

表 2 子どもの健康・保健に関する知識問題の分類別の正答率

問題の分類	平均正答率		
	対象者全体	大4	短2
問題全体 (30 問)	56.7%	65.6%	49.0%
1 子どもの発達と基本的知識 (12 問)	58.3%	63.9%	53.6%
2 先天性疾患 (4 問)	61.5%	66.7%	57.1%
3 感染症 (7 問)	37.5%	50.0%	26.8%
4 その他疾患や傷害 (7 問)	64.8%	76.2%	55.1%

に関する問題への正答率が低い傾向はみられたが、有意性は認められなかった。これらの結果から、養成課程の修業年限が子どもの健康・保健に関する知識量に影響している可能性が示された。本研究の対象者は修業年限の最終年(大学生は4回生、短大生は2回生)の学生であったが、データの取得は当該授業の開設期の関係上、前学期間の前半であった。そのため大学生が入学から3年(6期)経過している一方で、短大生は1年(2期)が経過しているに過ぎないことも、この結果の要因だと考えられる。

3) 子どもの健康・保健に関する態度・意識について

アンケートの「保育者が子どもの健康・保健についての知識を十分に持つことにより、どのような利点があると考えますか?」の質問に対する回答について、KH-coderによる対応分析により得られた布置図を図1に示す。大4と短2の表記に隣接する四角形を基準に、関連のある単語が近くに位置している。座標内の原点に近い単語は、どちらの対象群でも共通してみられていることを意味し、それぞれの四角の外部にあるものが、それぞれの対象群で特徴的にみられる単語といえる。「子ども」「保護」「対応」などの保育者としての基本ともいえる子どもの保護に関する意見が共通してみられた。短2の学生では「異変」「緊急」「応急」といった単語が特徴的にみられたことから、子どもの健康・保健について、緊急性のある子どもの傷病への対応に関する意識が強いことがうかがえる。言い換えるとこれは、子どもの異変への気づきや緊急時の対応を重要視しているといえる。保育という職業が、子どものいのちと直結したものであることを理解できている結果であると考えられる。一方で、大4の学生では「発達」「家庭」「虐待」「食事」「睡眠」という単語が特徴的にみられ、子どもの健康の背景にある発達状況や家庭環境などについての意識があることが示唆される。同様の内容が「保育者の子どもの健康・保健についての知識が不十分であった場合に、どのようなことが起こると考えられるか?」への回答の解析結果(図2)でもみられた。大4の学生は「子どもの健康・保健」を単なる「病気」「障害」というカテゴリーではなく、子どもの健康のすべてにかかわるものであると捉えていることがうかがえる。

授業感想の対応分析より得られた布置図を図3に示す。両対象群に共通して出現する単語として「医療」「保育」「支援」「看護」などの

単語がみられた。短2の学生では「課題」「意見」「学ぶ」「勉強」といった自身の知識向上への意識を表すような単語が多くみられた。大4の学生では「治療」「器具」「検査」といった保育者の領域を越えた具体的な医療行為に関係する単語が特徴的にみられた。

4) 子どもの健康・保健に関する学生の状況と求められる専門性の今後について

授業感想の対応分析の結果、大4と短2の学生に対比的にみられた表現として、短2では「聞ける」「学ぶ」といった単語がみられた。学修年限が大学生よりも短いということを意識しているためか、学修に対する意欲の高さが現れたものかもしれない。現職者を対象とした研究では、片岡ら⁹⁾が2012年段階で報告したように、保育に関する保健領域において保育士は、看護職者に対して保育士への教育的役割を担うよう期待しているということを反映していると考えられる。幼稚園教諭に関しても、筒井と脇村¹⁰⁾が報告したように、現職者は、保健活動について専門的な知識等は養護教諭に期待する面が大きいことが示されている。これらの報告から数年が経過しており、カリキュラム改定を経た現在、子どもの健康・保健に関する活動について前向きにとらえようとする回答が、学生から得られたことは興味深い。また、アンケート回答において「異変」「緊急」「応急」といった語がみられたこと、授業感想において自身の知識向上への意識を表すような単語がみられたことから、緊急時においても、子どもと向き合う保育者として問題解決につなげようという意識が現れていると考える。

一方、大4において、看護養成課程の学生との合同授業の感想に、「見せる」「伝える」といった能動的な動詞がみられたことは、学生の段階で、看護職者と対等に連携していこうという素地があることを示すと考えられる。アンケートの回答においては、子どもの健康の背景にある発達状況や家庭環境などについての単語がみられたことから、1つの健康問題に対する様々な可能性やアプローチを探る広い視野を持つことが示唆された。そのうえで、授業感想の回答から、「治療」「器具」「検査」などの単語がみられたことから、より高度な知識習得への欲求があるのかもしれない。

子どもにかかわる専門職者は、異なる専門性を持つ者が、「子どもの最善の利益」という共通目標を前提に、直面する子どもの健康に関わる問題の解決に向けて活動を展開することが重

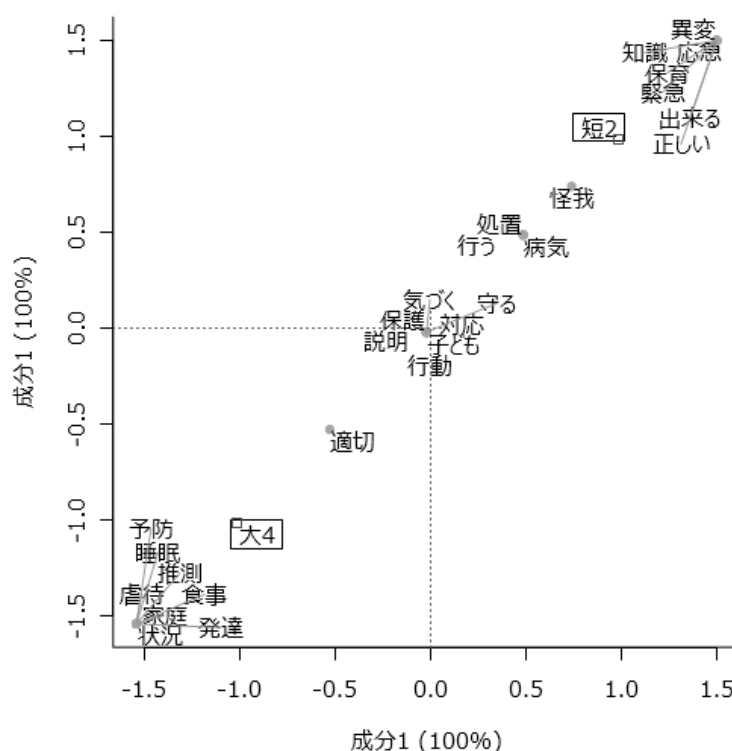


図1 質問2の回答の対応分析の結果

※外部変数が2であり、解析結果は1次元であるが、視覚的な分りやすさのため2次元座標上に表示している。以降の図で同様。

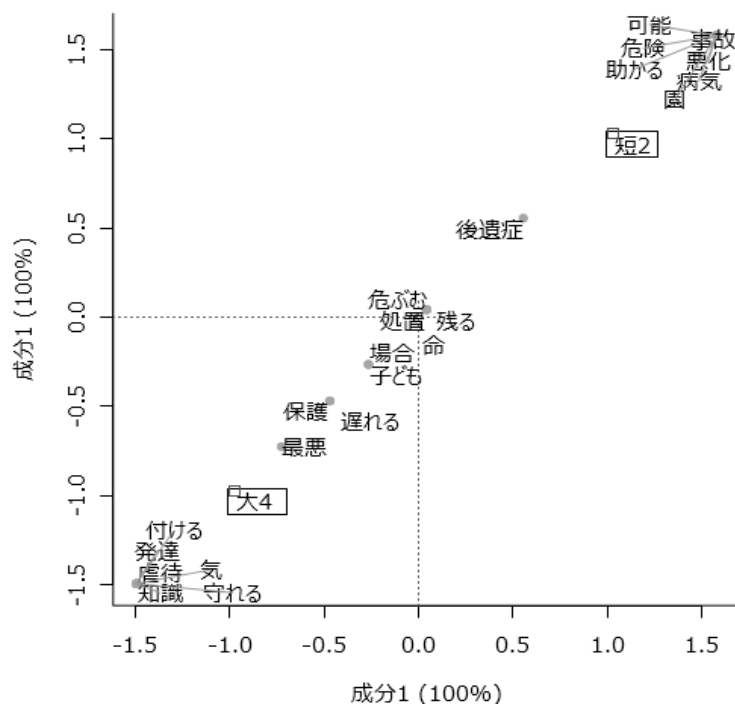


図2 質問3の回答の対応分析の結果

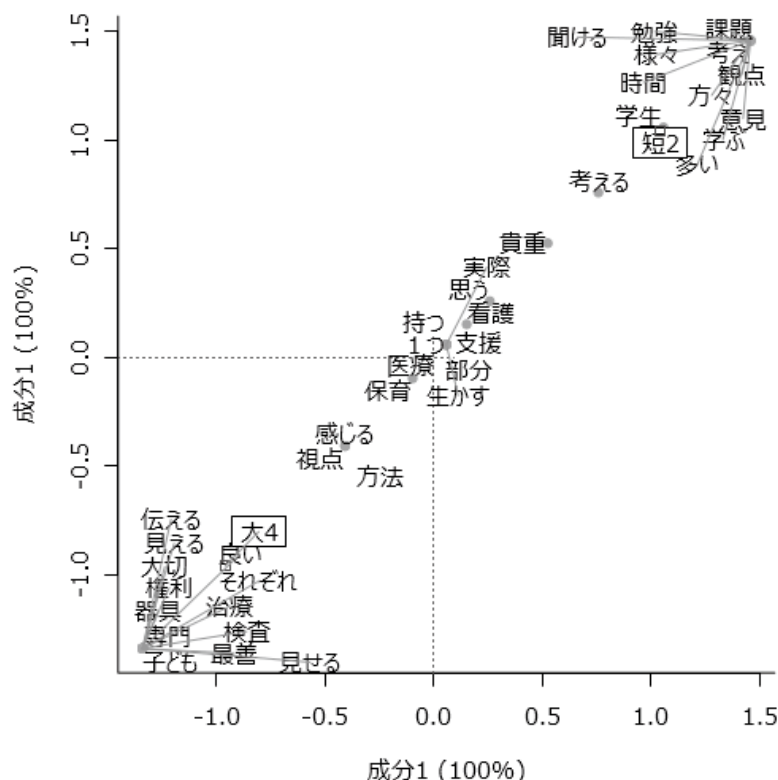


図3 授業感想の対応分析の結果

要だと指摘されている¹¹⁾。そのためには、子どもと多くの時間を過ごし、子どもたちにとって一番身近といえる保育者自身が、健康や保健に関する十分な知識を獲得するとともに、保育者を中心として、保育にかかわるその他の多職種との連携を進める必要がある。その連携は、どちらかが主・従というものではなく、それぞれの立場から「子どもの最善の利益」という目標を達成するために最善を尽くすということである。

5) 研究の限界と課題

まず、保育所保育指針の改定に伴うカリキュラムの新旧が結果に影響を及ぼしている可能性がある。本研究の対象者は大学4年生と短大2年生であったが、大学4年生はカリキュラム改定前の旧カリキュラムであり短大生は改定後の新カリキュラムであった。今後の研究では、大学と短大ともに新カリキュラムで学修をしている学年での対比が必要であると考えている。

今回、研究のほとんどを、インターネットを介した遠隔(リモート)の手法でおこなった。そのために、対面での詳細の説明や、大規模な対面形式での授業と計測ができていない。また遠隔(リモート)の手法では、インターネットの環

境によっては接続作業が面倒であったり、システム上の制限からアンケートの回答(選択肢・自由記述ともに)が手書きでの回答よりも時間を要したり、負荷がかかったりするといった学生に負担を強いてしまったことも否定できない。

上記の研究方法の制約と対象者への負担の影響から、対象者が少なく、サンプルサイズが小さかった。また対象者が、子どもの保健に関する選択授業を受講している学生と、乳幼児の保健をテーマの一つとする著者のゼミナールの学生であったことから、子どもの健康や保健についての関心がすでに高かった可能性がある。そこで今後の研究では対象者数を増やすとともに、幅広い保育学生の集団から情報を得る必要がある。

本研究で知識の指標として用いた問題について、必ずしも保育士に求められる子どもの健康や保健についての知識を網羅しているとは言えないことから、複数の専門家の協議によって作成することが望ましい。さらには、本研究を含めて、「保育士に求められる子どもの健康や保健についての知識」の全体像を明らかにすることで、当該分野に関わるカリキュラムの制定の一助になると考える。

おわりに

本事例研究の結果から、保育者養成課程の学生は、保育者としての専門性の向上には子どもの健康や保健についての領域が重要であると認識していること、修業年限が子どもの健康・保健に関する知識量に影響している可能性があること、子どもの健康や保健についての態度では、修業年限により特徴に差異がある可能性が示された。近年求められている保育者の専門性の向上のために、これらの結果を踏まえ、保育士養成課程におけるカリキュラムや教育内容の改善の検討がなされることが望まれる。

謝辞

本研究は、医療・保健分野についての遠隔（リモート）授業をおこなう上で、授業の企画、調整で長崎県立看護学校の田中伸子先生、授業案の作成、進行で西村優子先生に多大なるご協力をいただいたことを明記し、感謝の意を表したい。

参考文献

- 1) 厚生労働省 保育所保育指針
- 2) 文部科学省 幼稚園教育要領
- 3) OECD (2001) Starting strong: Early childhood education and care. OECD Publishing.
- 4) 是枝喜代治, 角藤智津子, 杉田記代子, 鈴木佐喜子 (2018) 「幼児期における特別なニーズのある子どもの支援に関する研究」『ライフデザイン学紀要』13号 pp. 107-131
- 5) 高旗正人, 中田周作, 池田隆英 (2007) 「保育者養成に対する社会的要請の調査研究」『中国学園紀要』6号 pp. 149-160
- 6) 保育所における医療的ケア児への支援に関する研究会 (2019) 「医療的ケアが必要な子どもへの支援体制に関する調査研究—保育所での医療的ケア児受け入れに関するガイドライン」https://www.mizuho-ir.co.jp/case/research/pdf/h30kosodate2018_0102.pdf (2020年8月12日閲覧)
- 7) 文部科学省 (2007) 「教員免許更新制」文部科学省 HP. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/koushin/index.htmf (2020年8月10日閲覧)
- 8) 厚生労働省 (2017) 「保育士等キャリアア

ップ研修ガイドライン」

[https://www.mhlw.go.jp/file/06-](https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/tuuti.pdf)

Seisakujouhou-11900000-

Koyoukintoujidoukateikyoku/tuuti.pdf (2

020年8月18日閲覧)

- 9) 筒井康子, 脇村桂子, (2012) 「幼稚園における保健活動の実態と養護教諭の必要性」『九州女子大学紀要』49巻(2号) pp. 55-72
- 10) 片岡亜沙美, 矢野智恵, 山崎美恵子 (2012) 「保育士の保育所看護職者への認識と期待する役割」『高知学園短期大学紀要』42号 pp. 55-66
- 11) 中野綾美 (2015) 『小児看護学(1): 小児の発達と看護 第5版』メディカ出版